

## 第9班

# 戦時下日本の大衆メディア研究

### (1) 共同研究員名

研究班代表：安田常雄

共同研究員：大川啓 大串潤児 森山優

研究協力者：小山亮 新垣夢乃 松本和樹 原田広 鈴木一史

### (2) 研究目的

この研究は、近年日本近現代史研究においても、広がりを見せている戦時下大衆メディアを対象に、そのプロパガンダの機能などを通して、戦時下大衆文化の構造を検証し、戦時体制の特質を再検討することにある。具体的には、非文字資料研究センターに収蔵されている「国策紙芝居」資料の分析を軸に、未発見の紙芝居資料の発掘に努めるとともに、未だ不十分である大衆文化の分析視角の共有化を進めることにある。第四期では、第三期におけるセンター収蔵作品の「解題」分析、全国における戦時下紙芝居の収蔵分布状況、その地域ごとの担い手の特徴、そして特に台湾調査を通して見えてきた植民地紙芝居の実像解明などの成果を継承しつつ、より広い視野で共同研究の深化を図りたい。たとえば第一に、国内においては、拠点の一つであった北海道などでの実態、各地で活動した担い手の解明などの課題がある。第二には台湾で着手した植民地紙芝居の分析を、同時代の朝鮮や中国などにも拡張すること。このテーマについてはそれぞれの地域の紙芝居研究者の存在や資料状況についても少しずつ判明しつつあり、協業の可能性も考えられる。こうした東アジア規模での比較紙芝居研究は今後の重要な課題となるものと思われる。そして第三には、国内だけでなく東アジアにおいても、上からの戦時宣伝の力と土着の文化との相克という視点が重要であり、この観点は同時代の映画・流行歌・演劇（芝居）・写真・漫画などとの関係が浮かび上がってくるテーマであろう。また第三期の研究過程で、アメリカやカナダにも紙芝居研究者がおり、すでにすぐれた著作が刊行されていることもわかってきた。第四期ではこうした海外の研究者との連携を積極的に推し進め、戦時下大衆文化の国際的視野の拡大を展望したいと考えている。

### (3) 活動経過（目的達成のための方法、各年度の研究・調査経過、成果の公開状況等）

#### 2017年度

- 1 2017年度の活動の中心は、年度末に刊行予定の「非文字資料研究叢書1」（『国策紙芝居からみる日本の戦争』）の執筆であり、加えて継続的な若干の現地調査と紙芝居研究会を行った。
- 2 2017年9月9日、この年度第1回の紙芝居研究会を行った。議題としては、①2017年10月14

日実施予定の台湾シンポジウムについて、②成果報告書の刊行についてとして、今後のスケジュールなどが審議された。③としては、第四期（2017-19年度）共同研究の計画が審議された。例えば、「非文字資料研究叢書1」刊行後の非文字主催シンポジウムの日程、報告者・コメンテーターの人选、継続的な調査・分析の内容として、北海道・台湾・朝鮮などの可能性について議論された。また、当日は、大串潤児「戦時国策紙芝居論」、鈴木一史「戦場を描く一国策紙芝居と戦争画の比較から」の予備報告が行われた。

- 3 2017年12月16日～18日、兵庫県豊岡市において、豊岡市在住の川見章夫氏が所有する国策紙芝居の現物調査を行った（福住地区コミュニティセンター）。また、当地ゆかりの生活記録教育者、東井義雄記念館、戦時下の政治家斎藤隆夫の記念館「静思堂」を見学した。
- 4 2018年3月25日、『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版）の刊行に合わせ、「アジア太平洋戦争と国策紙芝居」と題し、2017年度非文字資料研究センター第6回公開研究会を行った。当日は、以下4本の報告とコメントが発表された。①森山優（静岡県立大学）「国策紙芝居の数量的研究」、②シャラリン・オルバー（カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学）「戦時下紙芝居における母・女性の表象」、③権希殊（韓国・建国大学）「植民地紙芝居：朝鮮の事例より」、④大串潤児（信州大学）「誰が紙芝居を演じたか？：戦時紙芝居の実践者」、コメンテーター：真鍋昌賢（北九州市立大学）、浅岡靖央（白百合女子大学）。この公開研究会については、『非文字資料センター News Letter』No. 40、2018年9月を参照されたい。

## 2018年度

- 1 2018年6月1日～5日、京都・滋賀・愛知（亀岡市文化資料館、愛荘町、人形劇の図書館、砥鹿神社等）にて、紙芝居現物調査および関連資料の調査を行った。
- 2 2018年7月28日、2018年度第1回研究会（神奈川大学）を行った。当日は、子どもの文化研究所所員、高瀬あけみ氏による「教育紙芝居を育てた先人が何を實現したかったのか—紙芝居・創造と芸術」の報告と、子どもの文化研究所紙芝居室長、元山三枝子氏による紙芝居「うづら」の実演が行われ、活発な議論が行われた。
- 3 2018年11月10日、2018年度第2回研究会（神奈川大学）を行った。当日は①報告、新垣夢乃「植民地台湾で紙芝居はどう演じられ、どう見られていたのか」、②紙芝居上演「『みのる秋』『好年冬』日本語・台湾語による上演」、③報告、原田広「戦時下紙芝居の登場人物」が発表され、活発な討論が行われた。
- 4 2018年11月23日～25日、長野県（須坂市立博物館、信州戦争資料センター、千曲市ふる里漫画館、近藤日出造記念館）にて、紙芝居現物調査および関連資料の調査を実施した。
- 5 2018年12月22日、静岡県立大学において、同大学が「浦上喜平収集紙芝居」の寄贈を記念して開かれた「紙芝居研究会シンポジウム」に、紙芝居班の多くのメンバーが参加した。当日は、森山優「浦上史料の概要」が報告され、また基調講演として、安田常雄「『国策紙芝居』—その視点と問題群」、研究報告として、新垣夢乃「植民地台湾の紙芝居—故郷喪失者が描いた『ふるさと』『日本』—」が行われた。
- 6 2018年12月26日、2018年度紙芝居研究会を行った（神奈川大学）。この日は今後の調査計画、

研究成果のまとめ、2019年度の公開研究会開催などについて、意見交換が行われた。

- 7 2019年2月15日～2月17日、姫路・高松・徳島の現地調査を実施した。具体的には、兵庫県立歴史博物館、高松市平和記念館、徳島県立文書館において、戦時下紙芝居の現地調査を行った。
- 8 2019年3月17日、新所沢において、アニメーター、キャラクターデザイナーの小田部羊一氏の聞き書きインタビューを行った。小田部氏は、1936年台北生まれ。父親である小田部三平氏は、植民地統治下の台湾において、台北市日新公学校などの訓導として教鞭をとり、敗戦直前には総督官房情報課の嘱託を務めた。教育のかたわら自ら絵を描くなど、戦時下植民地の子ども文化に関わりをもった人であり、そのプロフィールを中心に話をうかがった。
- 9 2019年3月18日、紙芝居班の研究会（神奈川大学）。今後の調査などについて話し合った。

#### 2019年度

- 1 2019年5月17日～19日、滋賀県大津市の「人形劇の図書館」において、国策紙芝居の現物調査を行った。
- 2 2019年8月1日～4日、紙芝居北海道調査が実施された。2日、函館遺愛幼稚園所蔵資料の閲覧、所蔵紙芝居の写真撮影、坂本紀子氏（北海道教育大学）参加、3日、札幌道立文学館にて、紙芝居閲覧、札幌の北海道博物館にて、研究会が行われた。坂本紀子氏、谷暎子氏、安田、大串、森山、鈴木、参加。
- 3 2019年9月21～22日、群馬県利根郡みなかみ町の「民話と紙芝居の家」にて、国策紙芝居調査を行う。原田、新垣、大串、安田が参加。
- 4 2019年10月13日、国策紙芝居の「公開研究会」を計画していたが、台風のため、延期になった。
- 5 2020年2月29日、非文字資料研究センター2019年度第2回公開研究会として、開催を予定していた「戦時下紙芝居と現代人形劇の交差点」は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、当面延期することになった。

#### (4) 研究成果（成果物、獲得された知見、収集資料の解題等）

##### 2017年度

- 1 2018年2月、紙芝居班の第三期報告として、『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版、2018年2月28日）を「非文字資料研究叢書1」として刊行した。
- 2 2017年度の紙芝居班の刊行物については、以下の作品が発表された。大串潤児「『国策紙芝居』—北海道（札幌・京極町）調査報告」『非文字資料研究センター News Letter』No.38、2017年9月所収、原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語」—「用語編」その6」同上書所収。新垣夢乃「『植民地朝鮮と台湾の風景と記憶』参加記」『非文字資料研究センター News Letter』No.39、2018年1月所収、原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語」—「用語編」その7」同上書所収。権希殊「植民地朝鮮の紙芝居—視覚メディアを利用した情報宣伝」同上書所収。

## 2018年度

- 1 書評・紹介、横尾忠則、『朝日新聞』2018年6月2日付。
- 2 書評・紹介、加藤徹、『読売新聞』2018年4月29日付。
- 3 書評・紹介、野上暁「ヴィジュアルプロパガンダとしての紙芝居」『読書人』No.3242、2018年6月8日付。
- 4 書評・紹介、早川タダノリ「戦時下紙芝居の全容に迫る」『図書新聞』No.3357、2018年6月30日付。
- 5 書評・紹介、栗原俊雄「国策紙芝居241点を研究—神奈川県大グループが本刊行」、『毎日新聞』2018年7月9日付。
- 6 書評・紹介、渡辺知弘「『国策紙芝居』にみる戦時社会」『信濃毎日新聞』2018年7月26日付。
- 7 書評・紹介、「紙芝居からみる戦時、街頭は統制、国策一色に」、東京土建一般労働組合『けんせつ』2018年8月20日付。
- 8 書評・紹介、「紙芝居が担った戦時宣伝—生々しい戦闘描写や動物の物語、戦意高揚の仕掛けに、安田常雄（文化）」『日本経済新聞』2018年9月28日付。
- 9 書評・紹介、片岡輝「『国策紙芝居からみる日本の戦争』を読む」、子どもの文化研究所『子どもの文化』2018年10月。
- 10 2018年11月23日～25日、長野県（須坂市立博物館、信州戦争資料センター、千曲市ふる里漫画館、近藤日出造記念館）にて、紙芝居現物調査および関連資料の調査を実施した。
- 11 井口賢太「『国策紙芝居』映す『総力戦』」『信濃毎日新聞』2018年11月25日付。
- 12 2018年11月24日、前掲の『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版）が、今年度の日本児童文学学会特別賞を受賞することになり、その授賞式が埼玉県の文教大学で行われた。
- 13 書評・紹介、浅岡靖央「『国策紙芝居からみる日本の戦争』」、『児童文学研究』51、2018年。
- 14 書評・紹介、古川隆久「『国策紙芝居からみる日本の戦争』」、『神奈川大学評論』92、2019年3月。
- 15 なお2018年度の紙芝居班の刊行物については、以下の作品が発表された。大串潤児・原田広「『国策紙芝居』—但馬出石調査報告」、『非文字資料研究センター News Letter』No.40、2018年9月所収、原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語」—「用語編」その8」同上書所収。高瀬あけみ「教育紙芝居を育てた先人が何を実現したかったのか—紙芝居・創造と芸術」『非文字資料研究センター News Letter』No.41、2019年3月所収、新垣夢乃「亀岡—大津—愛荘—豊川紙芝居調査報告」同上書所収、原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語」—「用語編」その9」同上書所収。

## 2019年度

- 1 書評・紹介、石山幸弘「子どもの文化・子どもの本研究レポート 研究組織の力・大冊『国策紙芝居からみる日本の戦争』を見る」、『子どもの文化』51-4、2019年4月。
- 2 2019年7月6日、『国策紙芝居からみる日本の戦争』が、子どもの文化研究所の第3回堀尾青史賞を受賞。授賞式は学習院 ラウンジ目白倶楽部 松本楼で行われ、安田代表などが出席した。
- 3 「おもちゃも戦場へ、戦争中の紙芝居 子どもたちに宣伝」、『毎日小学生新聞』2019年8月15

日付。

- 4 2019年8月21日、NHK ラジオ第一放送、「Nらじ」（午後6時19分～45分）で、国策紙芝居が取り上げられ、安田代表、出席する。
- 5 書評・紹介「『共感力』引き出す 紙芝居 集中促す効果 内外で注目」『読売新聞』2019年9月13日付。
- 6 2019年9月30日、非文字資料研究センター『News Letter』No.42に、以下の論考が掲載された。鈴木一史「『戦時下日本の大衆メディア研究』班信州資料調査報告」、森山優、大串潤児「姫路一高松一徳島紙芝居調査報告」、原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語—『用語編』その10」
- 7 書評・紹介、石山幸弘「広角的研究の成果：『国策紙芝居からみる日本の戦争』を読む」、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター編『非文字資料研究』18、2019年9月。
- 8 書評・紹介、鶴見太郎、「『国策紙芝居からみる日本の戦争』」、歴史科学協議会編『歴史評論』2019年10月。
- 9 2019年度の刊行物として、以下の作品が発表された。新垣夢乃「『人形劇の図書館』『大津市歴史博物館』における紙芝居調査」『非文字資料研究センター News Letter』No.43、2020年3月所収。大串潤児「国策紙芝居—北海道函館調査・札幌での研究会記録」同上書所収。坂本紀子「北海道の教育紙芝居」同上書所収。原田広「戦時下日本の大衆メディア研究班みなかみ町猿ヶ京『民話と紙芝居の家』調査報告」同上書所収。原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語—『用語編その11』」同上書所収。

#### (5) 今後の課題と展望（自己点検・評価）

本共同研究は、神奈川大学非文字資料研究センター所蔵の241点の「国策紙芝居」を基礎に、加えて日本国内及び日本統治下台湾の資料などを主な対象に、現地発掘や関連資料の聞き書きなどを行い、多くの成果を得ることができた。特に、2018年には、神奈川大学非文字資料研究センター編『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版）を刊行することができた。本書は、センター所蔵資料241点の「作品・解題」、「個別論文」、「全国書誌情報」の三つからなり、このテーマに関するほとんどはじめての総括的分析として、多くの反響を得ることができた。具体的には、すでに「活動経過・研究成果」に時系列的に詳述したように、多くの書評・紹介が出され、また新聞・雑誌、ラジオなどのメディアでも広範に紹介された。さらに2018-9年には、日本児童文学学会特別賞、子どもの文化研究所の第3回堀尾青史賞を受賞することになった。

今後の展望としては、一方では日本国内におけるさらなる調査をすすめ、他方で、課題として残っている日本統治下朝鮮や台湾における植民地紙芝居の調査・研究にも拡張させていきたいと考えている。今年度以降、こうした活動を通して、いわば『国策紙芝居からみる日本の戦争』の「続編」ともいふべき報告集の作成を展望したい。